

# 語学教育におけるポートフォリオに対する意識の調査研究 —— 教職経験者と教職未経験者の比較をとおして ——

北 條 礼 子\*・松 崎 邦 守\*\*

(平成16年10月29日受付；平成16年12月8日受理)

## 要 旨

先行研究により、ポートフォリオの最大の弱点として、学習者、教師のどちらにとっても多大な労力と時間がかかることが指摘されている。ここからポートフォリオがより広範に活用されるためには、学習者、教師両者の労力と時間両面の簡略化が必要であると考えられる。そこで、本稿はポートフォリオの簡略化のための基礎資料として本学大学院生がポートフォリオをどのように捉えているかという意識を明らかにすることを目的としている。2004年5月に本学現職派遣大学院生69名、同現役大学院生65名の計134名を対象にアンケートを実施した。その上で対象者全134名のうち、ポートフォリオということばを聞いたことのある現職派遣大学院生54名、現役大学院生18名のポートフォリオに対する意識を検討した。その結果、現職派遣大学院生、現役大学院生ともポートフォリオの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取ることができるが、ポートフォリオのより手軽な活用法があるとよいと感じていた。

さらに、現職派遣大学院生は現役大学院生に比べて、ポートフォリオの作成・活用は手間がかかること、ポートフォリオが総合的な学習ばかりでなく、教科学習や小学校英語の実践においても有効な手法であると捉えていることが明らかになった。

## KEY WORDS

portfolio            ポートフォリオ            simplified portfolios            簡略化ポートフォリオ  
instructional tool   教授ツール            curriculum development   カリキュラム開発

## 1. 研究の背景

ポートフォリオは1980年頃から欧米の教育分野において、学習や評価に適應され始めた。ポートフォリオを作成することによって学習の過程を学習成果と関連づけて記録することが可能であり、構成主義の学習観に賛同する授業実践者や研究者がポートフォリオに関心を寄せたことがその一因と言われている(余田, 2001)。

国内では、ポートフォリオは近年、総合的な学習の評価手段として注目を集めるようになったが、総合的な学習ばかりではなく、教科学習においても有効な教授ツールあるいは評価ツールであることが指摘されている(村川, 2001；西岡, 2003)。しかし、国内においては教授ツールとしてのポートフォリオに関する実証的研究は数が少なく、特に外国語としての英語教育に

---

\* 学習臨床講座

\*\* 千葉県沼南町立高柳中学校

おけるポートフォリオの実践研究例はほとんど見受けられない。この分野では、わずかに峯石(2001)による調査と松崎(2003;2004)による実証的研究がみられるくらいである。教授ツールとしてのポートフォリオに関する研究が少ない理由としてその実践が困難であるという弱点も指摘されている。Linn 他(2000)はポートフォリオの弱点として、特に学習者、教師の両者にとって大変時間や労力がかかることを指摘している。

ところで筆者らは本研究に先立って、C 県公立小学校教員257名を対象にポートフォリオに関する意識調査を実施し、そのうちポートフォリオということばを聞いたことのある159名の回答を分析した(北條・松崎, 2004)。その結果、対象者はポートフォリオの特徴、構成要素などについての知識が十分であるとはいえないもの、ポートフォリオが総合的な学習ばかりでなく、教科学習においても有効な手法であると捉えていることが明らかになった。しかし、この研究の対象者は小学校教員であったので、小学校以外の教員も対象としたうえで、教職経験者と教職経験のない教職未経験者の意識も併せて検討することにした。

筆者らは将来的に公立小学校に英語が教科として導入される可能性があることを考慮に入れ、ポートフォリオが小学校においても教授ツール、評価ツールとして有効な手段となり得ると考えている。しかし、ポートフォリオの実施には、学習者ばかりでなく教師にとっても大変な時間や労力がかかることから、簡略化を図れば、その実施が容易になるものと予想される。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、公立小学校教員のポートフォリオに対する認識を明らかにすることである。本研究の第二の目的は、教職経験の有無によりポートフォリオに対する意識に違いがあるかどうかを明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

- 3.1 対象者： 本学大学院生134名。内訳は現職派遣大学院生69名、現役大学院生65名
- 3.2 測定具： ポートフォリオに関する4項目(2者択一形式)、ポートフォリオの効用、弱点に関する24項目(5段階尺度形式)の計28項目から成るアンケート
- 3.3 実施時期：2004年5月
- 3.4 手続き： 集団調査で約10分間で実施した。
- 3.5 分析方法： $\chi^2$ 検定、分散分析

## 4. 研究の結果と考察

### 4.1 ポートフォリオということばを聞いたことばあるかどうかについて

「ポートフォリオということばを聞いたことがあるかどうかについて、肯定・否定の頻度数を算出し、現職派遣大学院生、現役大学院生ごとに $\chi^2$ 検定を行ったが、その結果は表1に示すとおりである。

表1をみると、現職派遣教員大学院生69名のうち、ポートフォリオということばを聞いたことがあると回答した対象者が69名中54名、聞いたことがない対象者が15名であった。 $\chi^2$ 検定の

表1：ポートフォリオということばを聞いたことがあるか  
 どうかに関する項目の頻度数・ $\chi^2$ 検定結果 (N=134)

項目	項目内容	対象者	肯定	否定	$\chi^2$ 検定結果	
					$\chi^2(1)$	p
1	ポートフォリオという言葉 を聞いたことがある	現職派遣大学院生	54	15	22.04	**
		現役大学院生	18	47	12.93	**

\*\*p<.01

結果、 $\chi^2(1)$ は22.04であり、ポートフォリオということばを聞いたことのある教員数の方が1%レベルで有意に多かった。

次に、教職経験のない現役大学院生65名のうち、ポートフォリオということばを聞いたことがある対象者は65名中18名、聞いたことがないものが47名であった。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)$ は12.93であり、ポートフォリオということばを聞いたことがない人数の方が1%レベルで有意に多かった。

また、現職派遣大学院生と現役大学院生を比較すると、 $\chi^2(1)$ は34.42であり、1%レベルで有意であった。残差分析の結果、現職派遣大学院生、現役大学院生の肯定、否定のすべての頻度数が5%レベルで有意であった。具体的には、現職派遣大学院生はポートフォリオということばを聞いたことがある人数が多く、聞いたことのない人数が少ないこと、さらに現役大学院生については聞いたことがある人数が少なく、聞いたことのない人数が多いことが明らかになった。

以上から教職経験の有無により、ポートフォリオということばを聞いたことがあるかどうかについて、教職経験の有無による違いがあり、少なくともポートフォリオということばを聞いたことのある教職経験者の方が多いたことがわかった。

なお、これ以降、この項目に対して「はい」という回答を選択した現職派遣教員大学院生54名、現役大学院生18名の計72名の回答を基に分析を行った。

#### 4.2 ポートフォリオへの関心の有無、作成経験、活用希望について

次に、現職派遣教員大学院生54名、現役大学院生18名それぞれのポートフォリオへの関心の有無、作成経験、活用希望に関する項目について、肯定・否定の回答数の集計と $\chi^2$ 検定結果は以下の表2のとおりである。

表2をみると、現職派遣教員大学院生54名中、ポートフォリオに関心があると回答した教員が42名、関心がないと回答した教員が12名であった。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)$ は16.66であり、ポートフォリオに関心のある教員数の方が1%レベルで有意に多かった。また、教職経験のない現役大学院生18名中、ポートフォリオに関心があると回答した学生が16名、関心がないと回答した教員が2名であった。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)$ は10.88であり、ポートフォリオに関心のある教員数の方が1%レベルで有意に多かった。

次に、ポートフォリオを作成した経験があるかどうかについては、現職派遣教員大学院生による回答の頻度数をみると、作成経験があると回答した教員が34名、作成経験がないと回答した教員が20名であった。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)$ は3.62であり、ポートフォリオの作成経験のある

表2：ポートフォリオへの関心，作成経験，活用希望の有無に関する項目の頻度数・ $\chi^2$ 検定結果 (N=72)

項目	項目内容	対象者	肯定	否定	$\chi^2$ 検定結果	
					$\chi^2(1)$	p 比較結果
1	ポートフォリオへの関心の有無	現職大学院生	42	12	16.66	** 肯定>否定
		現役大学院生	16	2	10.88	** 肯定>否定
2	ポートフォリオ作成経験の有無	現職大学院生	34	20	3.62	+ 肯定>否定
		現役大学院生	8	10	0.22	ns 肯定 $\approx$ 否定
3	ポートフォリオ活用希望の有無	現職大学院生	37	17	7.40	** 肯定>否定
		現役大学院生	13	5	3.55	+ 肯定>否定

+ .05&lt;p&lt;.10 \*\*p&lt;.01

教員数が有意に多い傾向を示した。現役大学院生の回答をみると，作成経験があると回答した学生が8名，作成経験がないと回答した学生が10名であった。 $\chi^2$ 検定の結果， $\chi^2(1)$ は0.22であり，ポートフォリオの作成経験の有意差はみられなかった。

最後に，ポートフォリオを活用する希望があるかどうかについては，希望があると回答した現職派遣教員大学院生は37名，希望がないと回答した現職派遣教員大学院生は17名であった。 $\chi^2$ 検定の結果， $\chi^2(1)$ は7.40であり，ポートフォリオを活用する希望のある教員数の方が1%レベルで有意に多かった。また，ポートフォリオの活用希望があると回答した現役大学院生は13名，活用の希望がないと回答した現役大学院生は5名であった。 $\chi^2$ 検定の結果， $\chi^2(1)$ は3.55であり，ポートフォリオの活用希望のある学生数が有意に多い傾向を示した。

#### 4.3 ポートフォリオの効用・弱点について

##### 4.3.1 全 員

###### 4.3.1.1 平均・標準偏差

対象者全員の72名の回答を基に，ポートフォリオの効用・弱点に関する5段階評価の24項目の平均，標準偏差を求めたが，その結果は表3に示すとおりである。

平均値が4.0を越えている項目については回答者がその項目内容に対して強い賛意を示していると判断したが，表3をみると項目3と項目13が該当していた。この2項目の項目内容を見ると，項目3はポートフォリオの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れるというものである。項目13はポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法への希望であり平均が最も高かった。

###### 4.3.1.2 分散分析結果

対象者全員72名の回答した24項目間に差があるかどうかを検討するため分散分析を行った結果，1%レベルで有意であった ( $F(20,1633)=6.10$ )。そこで，LSD法による多重比較を行った ( $MSe=0.58$ ，5%水準)。

この多重比較の結果に基づき，以下のことが，本調査の対象者72名の注目すべき特徴としてあげられよう。

表3：ポートフォリオの効用・弱点に関する24項目の平均、標準偏差（全員：N=72）

項目	項目内容	平均	SD
1	Pの活用により学習者はねらいにそって自分の学びを容易に収集できる	3.56	0.87
2	Pの作成により学習者は自分の学習に対して振り返る力を高められる	3.94	0.89
3	Pの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れる	4.03	0.77
4	Pの作成・活用は教師にとって手間がかかることである	3.99	1.03
5	Pの作成により教師及び学習者自身は学びを真正に評価できる	3.58	0.83
6	Pの作成によりメタ認知(計画・評価・修正)の力を高めることができる	3.72	0.83
7	Pの作成により学習方略使用への意識を高めることができる	3.56	0.77
8	Pの作成により教師は必要な場面で適切な支援を与えやすくなる	3.78	0.75
9	P作成により学習者は教師や仲間と容易にコミュニケーションできる	3.39	0.88
10	Pは総合的な学習においてより有効性を発揮する	3.78	0.97
11	小学校英語の実践にもPを活用できる	3.56	0.95
12	教科学習においても有効性を活用できる	3.79	0.92
13	Pをもっと手軽に活用できる手法があるとよい	4.14	1.03
14	Pのガイドライン(G)は学習者に明示されるべきである	3.85	0.78
15	Pの実践には毎時間の学習を振り返る活動は必要である	3.83	0.95
16	Pの実践には学びが学習者間で共有されるための活動が必要である	3.68	0.92
17	Pの実践にはカンファレンスが不可欠である	3.56	0.79
18	Pは学習ファイルとは明確に異なるものである	3.26	1.13
19	Gにはループリックが明示されるべきである	3.22	0.72
20	Gには学習目標が明示されるべきである	3.63	0.90
21	Gには学習計画が明示されるべきである	3.65	0.91
22	Gの作成では学習者の希望や考えをできる限り反映させる必要がある	3.65	0.81
23	Gの作成ではアンケートなどにより学習者のニーズを探る必要がある	3.78	0.81
24	Pの作成により学習者の自律的学習力を高めることができる	3.75	0.85

(注) P：ポートフォリオ，G：ガイドライン

- ① ポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法があるとよい(項目13：平均4.14)，と期待しているが，同時にポートフォリオの作成・活用には教師の手間がかかる(項目4：平均3.99)とも感じている(項目4⇔項目13)。
  - ② ポートフォリオは総合的な学習(項目10：3.78)，教科(項目12：3.94)のどちらにも有効であり，そして小学校英語の実践(項目11：3.56)にもどちらかという有効であると考えている(項目12⇔項目11)。
  - ③ ポートフォリオは学習者が自分の学習を振り返るのに有効であり(項目2：3.83)，同時にその実践には毎時間の学習を振り返る活動が必要である(項目15：3.83)と感じ，ポートフォリオにおける振り返りの重要性をある程度意識している(項目2⇔項目15)。
- ポートフォリオは，その第一の弱点として教師，学習者の両者にとって作成・活用の手間が大変かかることが指摘されているが(Linn 他，2000)，ポートフォリオのこの弱点が意識されていることから，実際に少なくともポートフォリオを作成・活用した経験があるものが多いと推察される。また，ポートフォリオを生かす学習分野については，平均も併せて考慮に入れると，

総合的な学習、教科学習の両方にとって、さらに小学校英語の実践においても有効であると考  
えていることがわかった。最後に、ポートフォリオ作成の過程には学習を振り返る内省(reflec-  
tion)が必要要素であることが指摘されているが(Yancey, 1992)、この指摘が理解されつつあ  
るものと推測される。

#### 4.3.2 現職派遣教員大学院生と現役大学院生(教職未経験者)の比較

##### 4.3.2.1 現職派遣教員大学院生と現役大学院生(教職未経験者)の平均・標準偏差

現職派遣教員大学院生54名、現役大学院生18名それぞれのポートフォリオのに効用・弱点に  
関する24の各項目について、平均、標準偏差を求めたが、その結果は表4に示すとおりである。

現職派遣教員大学院生54名の回答のうち、平均値が4.0を越えている項目(表4内で太字で表  
示)に注目し、表4をみると項目3、項目4、項目13の3項目が該当していた。この3項目の  
内容をみると、項目3はポートフォリオの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見

表4：ポートフォリオの効用・弱点に関する24項目の現職・現役別の平均・標準偏差

項目	項 目 内 容	現職(N=54)		現役(N=18)	
		平均	SD	平均	SD
1	Pの活用によりねらいに学びの容易な収集	3.61	0.81	3.39	1.04
2	Pの作成による学習への振り返る力の向上	3.94	0.79	3.94	1.16
3	<b>Pの作成による教師の学びの過程の見取り</b>	4.00	0.70	4.11	0.96
4	<b>Pの作成・活用は教師に手間がかかる</b>	4.17	0.93	3.44	1.15
5	Pの作成による学びの真正な評価	3.65	0.78	3.39	0.98
6	Pの作成によるメタ認知力の向上	3.70	0.82	3.78	0.88
7	Pの作成による学習方略使用意識の向上	3.57	0.72	3.50	0.92
8	Pの作成により教師は適切な支援可	3.81	0.73	3.67	0.84
9	P作成により容易にコミュニケーション	3.41	0.81	3.33	1.08
10	Pは総合的な学習においてより有効	3.93	0.87	3.33	1.14
11	小学校英語の実践にもP活用可	3.67	0.85	3.22	1.17
12	教科学習においてもの有効性を活用可	3.91	0.78	3.44	1.20
13	<b>Pのもっと手軽な活用法があるとよい</b>	4.13	1.01	4.17	1.10
14	PのGは学習者に明示されるべき	3.91	0.78	3.67	0.77
15	P実践に毎時間の学習を振り返る活動必要	3.91	0.85	3.61	1.20
16	Pの実践に学習者間で共有する活動が必要	3.74	0.81	3.50	1.20
17	Pの実践にはカンファレンスが不可欠	3.65	0.78	3.28	0.75
18	Pは学習ファイルとは明確に異なる	3.26	1.15	3.28	1.07
19	Gにはルーブリックが明示されるべき	3.31	0.72	2.94	0.64
20	Gには学習目標が明示されるべき	3.70	0.90	3.39	0.85
21	Gには学習計画が明示されるべき	3.76	0.91	3.33	0.84
22	G作成に学習者の希望を反映させる必要	3.65	0.78	3.67	0.91
23	G作成に学習者ニーズ探る必要	3.76	0.87	3.83	0.62
24	P作成により学習者の自律的学習力向上が可	3.87	0.73	3.39	1.09

(注) P：ポートフォリオ，G：ガイドライン

+ .05 < p < .10 \*p < .05 \*\*p < .01

取れるというものであり、項目4はポートフォリオの作成や活用は教師にとって手間がかかるというものである。さらに、項目13はポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法への希望であった。

現役大学院生18名の回答のうち、平均値が4.0を越えている項目に注目し、表4をみると項目3、項目13の2項目が該当していた。この2項目の内容は、項目3がポートフォリオの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れるというものであり、項目13はポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法への希望であった。

#### 4.2.1.2 分散分析結果

まず、現職派遣教員大学院生54名が回答した24項目間に差があるかどうかを検討するため分散分析を行った結果、1%レベルで有意であった ( $F(20,1219)=4.49$ )。そこで、LSD法による多重比較を行った ( $MSe=0.59$ , 5%水準)。

この多重比較の結果に基づき、以下のことが、現職派遣教員大学院生54名の注目すべき特徴としてあげられよう。

- ① ポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法があるとよい(項目13:平均4.13)、という期待しているが、同時にポートフォリオの作成・活用には教師の手間がかかる(項目4:平均4.17)とも感じている(項目4≒項目13)。
- ② ポートフォリオは総合的な学習(項目10:3.93)、教科科学習(項目12:3.91)のどちらにも、そして小学校英語の実践(項目11:3.67)にもかなり有効であると考えている(項目10≒項目11≒項目12)。
- ③ ポートフォリオは学習者が自分の学習を振り返るのに有効であり(項目2:3.94)、同時にその実践には毎時間の学習を振り返る活動が必要である(項目15:3.91)と感じ、ポートフォリオにおける振り返りの重要性を意識している(項目2≒項目15)。

次に、現役大学院生18名が回答した24項目間に差があるかどうかを検討するため分散分析を行った結果、1%レベルで有意であった ( $F(20,1219)=2.02$ )。そこで、LSD法による多重比較を行った ( $MSe=0.74$ , 5%水準)。

この多重比較の結果に基づき、以下のことが、現役大学院生18名の注目すべき特徴としてあげられよう。

- ① ポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法があるとよい(項目13:平均4.17)、と期待しているが、その一方、ポートフォリオの作成・活用には教師の手間がかかる(項目4:平均3.44)とは強く意識していない(項目4<項目13)。
- ② ポートフォリオは総合的な学習(項目10:3.33)、教科(項目12:3.22)のどちらにも、そして小学校英語の実践(項目11:3.44)についても同程度にどちらかというとも有効であるとする傾向があった(項目10≒項目11≒項目12)。
- ③ ポートフォリオは学習者が自分の学習を振り返るのに有効であり(項目2:3.94)、同時にその実践には毎時間の学習を振り返る活動が必要である(項目15:3.39)と感じ、ポートフォリオにおける振り返りの重要性をどちらかというとも意識している(項目2≒項目15)。

## 4.2.3.2 分散分析結果

現職派遣教員大学院生54名、現役大学院生18名それぞれのポートフォリオの効用・弱点に関する24の各項目について分散分析を行ったが、その結果は表5に示すとおりである。

表5をみると、24項目中、1%レベルで有意な項目が1項目、5%レベルで有意な項目が2項目、有意傾向を示した項目が4項目みられた。以上の項目を順にみていくと、まず1%レベルで有意だった項目は項目4の「ポートフォリオを作成し活用することは、教師にとって手間がかかることである」であった ( $F(1,70)=7.25$ )。次に、5%レベルで有意だった項目は、項目10の「ポートフォリオは総合的な学習においてより有効性を発揮する」( $F(20,1219)=5.38$ )と項目24の「ポートフォリオを作成することにより、学習者の自律的学習力を高めることができる」( $F(20,1219)=4.53$ )の2項目であった。最後に、有意傾向を示した項目は、項目11の「小学校英語の実践にもポートフォリオを活用できる」( $F(20,1219)=3.05$ )、項目12「教科学

表5：ポートフォリオの効用・弱点に関する24項目の平均・標準偏差，分散分析結果

項目	項目内容	現職 (N=54)		現役 (N=18)		ANOVA 結果	
		平均	SD	平均	SD	F(1,70)	大小関係 現職現役
1	Pの活用によりねらいに学びの容易な収集	3.61	0.81	3.39	1.04	0.88	ns
2	Pの作成による学習への振り返りの向上	3.94	0.79	3.94	1.16	0.00	ns
3	Pの作成による教師の学びの過程の見取り	4.00	0.70	4.11	0.96	0.28	ns
4	<b>Pの作成・活用は教師に手間がかかる</b>	4.17	0.93	3.44	1.15	7.25	** >
5	Pの作成による学びの真正な評価	3.65	0.78	3.39	0.98	1.31	ns
6	Pの作成によるメタ認知力の向上	3.70	0.82	3.78	0.88	0.11	ns
7	Pの作成による学習方略使用意識の向上	3.57	0.72	3.50	0.92	0.12	ns
8	Pの作成により教師は適切な支援可	3.81	0.73	3.67	0.84	0.52	ns
9	P作成により容易にコミュニケーション	3.41	0.81	3.33	1.08	0.09	ns
10	<b>Pは総合的な学習においてより有効</b>	3.93	0.87	3.33	1.14	5.38	* >
11	<b>小学校英語の実践にもP活用可</b>	3.67	0.85	3.22	1.17	3.05	+ >
12	<b>教科学習においても有効性を活用可</b>	3.91	0.78	3.44	1.20	3.55	+ >
13	Pのもっと手軽な活用法があるとよい	4.13	1.01	4.17	1.10	0.02	ns
14	PのGは学習者に明示されるべき	3.91	0.78	3.67	0.77	1.29	ns
15	P実践に毎時間の学習を振り返る活動必要	3.91	0.85	3.61	1.20	1.32	ns
16	Pの実践に学習者間で共有する活動が必要	3.74	0.81	3.50	1.20	0.93	ns
17	<b>Pの実践にはカンファレンスが不可欠</b>	3.65	0.78	3.28	0.75	3.09	+ >
18	Pは学習ファイルとは明確に異なる	3.26	1.15	3.28	1.07	0.00	ns
19	Gにはルーブリックが明示されるべき	3.31	0.72	2.94	0.64	3.75	ns
20	Gには学習目標が明示されるべき	3.70	0.90	3.39	0.85	1.69	ns
21	<b>Gには学習計画が明示されるべき</b>	3.76	0.91	3.33	0.84	3.07	+ >
22	G作成に学習者の希望を反映させる必要	3.65	0.78	3.67	0.91	0.01	ns
23	G作成に学習者ニーズ探る必要	3.76	0.87	3.83	0.62	0.11	ns
24	<b>P作成により学習者の自律的学習力向上が可</b>	3.87	0.73	3.39	1.09	4.53	* >

(注) P：ポートフォリオ，G：ガイドライン

+ .05 < p < .10 \* p < .05 \*\* p < .01



習においてもポートフォリオの有効性を活用できる」(F(20,1219)=3.55), 項目17の「ポートフォリオの実践にはカンファレンスが不可欠である」(F(20,1219)=3.65), 項目21の「ガイドラインには, 学習計画が明示されるべきである」(F(20,1219)=3.07)の4項目であった。

以上の結果から, 第一に教職経験者は教職未経験者と比べると, ポートフォリオの作成・活用の手間を有意に強く感じていることが明らかになった。総合学習の評価ツールとしてポートフォリオが用いられていることが多い(村川, 2001; 西岡, 2003)ことから, 教育現場にポートフォリオがかなり浸透していることの現われと考えられる。次に総合学習においてポートフォリオがある程度活用されていることから, その効用とポートフォリオ作成が目指す自律的学習能力の向上にも目が向けられているのであろう。第三に, 有意傾向を示した4項目の平均を考え合わせると, ポートフォリオが, 総合学習ばかりでなく, 教科学習そしてさらに小学校英語の実践への適用可能性を備えていると捉えられていることが推察される。また教職経験者は教職未経験者に比べてポートフォリオ作成の不可欠な構成要素であるガイドラインやカンファレンスにも意識を向けていると考えられる。

#### 4.2.3 まとめ

以上の結果から, 本研究の対象者となった現職派遣大学院生と現役大学院生がポートフォリオに対してどのような意識を抱いているかをまとめると, 以下のとおりである。

- ① 教職経験の有無により, ポートフォリオということばを聞いたことがあるかどうかについて違いがみられた。教職経験のある現職派遣大学院生の方がポートフォリオということばを聞いたことのある人数が有意に多かった。
- ② ポートフォリオに対する関心, 活用希望については教職経験の有無による差はなかった。現職派遣大学院生, 現役大学院生ともポートフォリオに関心があり, 活用の希望があるという回答が有意に多かった。ただし, ポートフォリオの作成経験については, 教職経験の有無による違いがあり, 現職派遣大学院生は経験があるとの回答者が有意に多い一方, 現役大学院生は経験がないとの解答者が有意に多かった。
- ③ 現職派遣大学院生, 現役大学院生ともポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法があるとよいと感じているが, ポートフォリオの作成・活用における教師の手間については, 意識の差がみられた。現職派遣大学院生は手間がかかると意識しているが, 現役大学院生はそれほど手間がかかるとは意識していなかった。
- ④ ポートフォリオが有効に生かせる分野については, 教職経験の有無による違いがみられた。現役大学院生ともそれぞれに, ポートフォリオが総合的な学習教科学習, 小学校英語の実践において有効であると捉えている。しかし, 現職派遣大学院生の方が, この3分野すべてにおいて, より有効であると意識していた。
- ⑤ ポートフォリオ作成に不可欠な要素のいくつかについて, 教職経験の有無による違いがみられた。現職派遣大学院生はカンファレンスとガイドラインにおける学習計画の明示について現役大学院生より強くその必要性を感じていた。
- ⑥ ポートフォリオにより養成される自律的学習能力の向上についても教職経験の有無による違いがみられた。現職派遣大学院生のほうがその効果を現役大学院生より強く感じていた。

以上から、教職経験の有無により、ポートフォリオ作成における教師の手間、ポートフォリオを有効に生かせる分野、ポートフォリオ作成に不可欠ないくつかの要素の必要性、ポートフォリオによる学習者の自律的能力の向上については意識が異なり、以上のすべてにおいて教職経験者の意識が上回っていた。しかし、教職経験の有無にかかわらず、より手軽な活用方法が期待されていることが明らかになった。このことから、筆者らの先回の研究結果同様、ポートフォリオのさらなる活用のためには、簡略化を図っていくことが不可欠であると考えられる。

### 引用・参考文献

- Benson, P., & P. Voller. 1997. *Autonomy & independence in language learning*. Longman.
- Delett, J. S., S. Barnhardt, & J. A. Kevorkian. 2001. A Framework for Portfolio Assessment in the Foreign Language Classroom. *FOREIGN LANGUAGE ANNALS*, 34, 6, 559-568.
- Genesee, F., & J. A. Upshur. 1996. Portfolio and conference. In *Classroom-based evaluation in second language education* (98-117). Cambridge University Press.
- Hojō, R., & K. Matsuzaki. 北條礼子・松崎邦守 2004. 「語学教育における簡略化ポートフォリオ開発への試みに関する基礎的研究」上越教育大学研究紀要, 24, 1, 245-255.
- Klenowski, V. 2002. *Developing portfolios for learning and assessment*. Routledge Falmer.
- LeMahieu, P. G., D. H. Gitomer, & J. T. Eresh. 1995. Portfolios in large-scale assessment: Difficult but not impossible. *Educational measurement: Issues and practice*, Fall, 11-28.
- Linn, R. L., & N. E. Gronlund. 2000. *Measurement and assessment in teaching (Eighth Ed.)*. Prentice-Hall.
- Matsuzaki, K. 松崎邦守. 2003. *A Study of Curriculum Development of EFL Writing Using Portfolios as an Instructional Tool*. 上越教育大学修士論文.
- Mineishi, M. 峯石 緑. 2001. 「大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究」 広島大学大学院博士論文.
- Murakawa, M. 村川雅弘. 2001. 「『生きる力』を育むポートフォリオ評価」ぎょうせい.
- Nishioka, K. 西岡加名恵. 2003. 「教科と総合に活かすポートフォリオ評価法～新たな評価基準の創出に向けて～」 図書文化.
- Oda, K. 小田勝巳. 1999. 「総合的学習に適したポートフォリオ学習と評価」 学事出版.
- \_\_\_\_\_ . 2000. 「子どもの成長を促すポートフォリオがよくわかる本」 学事出版.
- \_\_\_\_\_ . 2001. 「総合的な学習に活かすポートフォリオで学力形成」 学事出版.
- Paulson, F. L., P. R Paulson, & C. A. Meyer. 1991. What makes a portfolio a portfolio? *Educational Leadership*, 48, February, 60-63.
- Pemberton, R., E. S. L. Li, W. W. F. Or, & H. D. Person (eds.) 1996. *Taking control - Autonomy in language learning*. Hong Kong University Press.
- Slavin, R. E. 2002. *Educational psychology: Theory and practice* (7th ed.). Allyn and Bacon.
- Smolen, L. et al. (1995). Developing student self-assessment strategies. *TESOL JOURNAL*, Autumn, 22-27.
- Yancey, K. B. (ed.) 1992. *Portfolios in the writing classroom: An introduction*. The National

Council of Teachers of English.

Yoden, Y. 余田義彦 (編). 2001. 「生きる力を育てるデジタルポートフォリオ学習と評価」 高陵社書店.

# A Survey for Developing Simplified Portfolios Used in EFL Environments:

— Comparing Students Who Are Teachers with Students  
Who Will Be Future Teachers

HOJO Reiko\* and MATSUZAKI Kunimori\*\*

## ABSTRACT

The authors of this study have developed curriculum using portfolios in English as a Foreign Language environments, as well as in some other areas, such as Japanese Language or Social Studies environments at Japanese junior high schools. Though portfolios as an instructional tool have been reported to be effective to nurture self-regulated learners, it has also been pointed out that teachers require too much time in portfolio development. In order to develop simplified portfolios, questionnaires concerning portfolios were administered to 134 graduate students of this university in May of 2004. The results revealed that: 1) Both students who are teachers and students who will be future teachers felt that it would be better for simplified portfolios to be used; 2) Students who are teachers evaluated portfolios to be effective for various subjects, as well as integrated studies, and for English at elementary schools than teacher-to-be students; and 3) Students who are teachers seem to have more knowledge about crucial characteristics which can make portfolios successful than students who will be teachers. In conclusion, portfolios can be expected to be more effective if they could be simplified.

---

\* Division of Learning Support

\*\* Takayanagi Junior High School, Chiba